晴天の霹靂

徳川

息の詰まる音を、聞いたような気がした。

その音は助手席にいる者から発されたものなのか、それとも自分の喉から出たものなのか,……健二は深く考える前に思いっ切り右足を突っ張った。

瞬間、ぐん、とシートベルトが健二の体に食い込んだ。圧迫されて息が止まる。霞む視界で暴れるハンドルにしがみついたが、一向に車は止まる気配を見せない。雪の上を滑っているのだ、と健二は頭の片隅で理解した。しかし、今更後悔したところでどうすることもできない。無我夢中で必死にハンドルを繰る。それはひどく軽く、気休めにすらならないことはわかっていた。それどころか、健二の乗った車はスピンを伴い、より勢いを増して斜面を滑り降り始めることとなった。

健二の目に線状の景色が写る。雪の白、林の茶、そして海の青。それらが入り乱れ、拡散し、出鱈目に描いた絵のようになって窓を汚している。健二はもう何も考えることができなくなっていた。縦横無尽の加速度と浮遊感が、健二の感覚全てを支配していた。もう何も見たくない、健二はそう強く思って、逃げるように目を瞑った。

そして、車は小さな衝撃を最後に、ようやくその動きを止めた。

「びっくりしましたね。どうやら縁石に乗り上げた勢いで滑ったみたいですよ」

そう言って、高橋は飛び込むように助手席に乗り込んできた。ドアの開閉によって生まれた冷たい風が、健二の頬をひやりと冷ます。健二は横目で高橋を見て、すぐに視線を自分の膝へと戻してしまった。そして時間を掛けて、小さく「そうか」とだけ呟いた。ひどく乾いた声だった。

「ちょっと健二さん、大丈夫ですか？　運転代わりますか？」

健二の声色に驚き、高橋は健二の顔を覗きこんだが、すぐに身を引いて息を飲んでしまった。うつむいた健二の顔は憔悴しきり、とても四十半ばの年齢とは思えないほど、ひどく老齢しているように見えたからだ。高橋は健二の肩を軽くゆすり、努めて優しく「大丈夫ですか？」と尋ねたが、健二は顔を上げることさえできなかった。

死ぬところだった、と健二は思った。

一昨日の深夜まで降り続いた初雪は、日中になって雨へと変わった。融かされた雪は、舗装された道路の上を覆うように固まり、非常に滑りやすくなっていたのだ。早い初雪だったせいで、社用の乗用車はまだ雪面対策が取れていなかったのだろう。そこまで考えたところで、健二は細く震えた息を吐いた。

沈黙に耐えかねたのか、高橋は「いやー、危なかった危なかった」と誰に言うわけでもなく繰り返し呟いていた。その言葉で、最後の小さな衝撃を思い出した健二はふと心配になる。

「……ぶつけたのか？」
「あ、いえ、まあ」
少なからず反応を見せた健二に、高橋は曖昧な返事で返した。
「かなり長く滑りましたが、結構減速していたみたいで、ちょっと擦ったぐらいですよ。もう少し速かったら、突き当りのガードレールから海にドボンでしたからね。ラッキーですよラッキー」
明るい声だったが、どこか浮ついた様子だった。
咄嗟のブレーキが間に合ったのか、それともスピンさせたことが不幸中の幸いだったのか。座ったままの健二には確かなことはわからなかったが、どうやら急死に一生を得たようだった。健二は目を瞑ったまま、朦朧とした頭を何とか回転させて周辺の地形を想像した。長い斜面からT字路の形で、海に面した道へ出る場所だったはずである。あの粗末なガードレールに助けられたのか、と健二は震える手で額の汗を拭った。
「健二さん？　運転どうします？」
再度名前を呼ばれた事に気付き、健二は「ああ、ああ、頼むよ」と高橋に告げた。健二は二、三度強く目を瞑り、重く脱力した右腕でドアを掻いて、やっとのことで車の外へと足を出した。途端、強い寒風が健二の体を撫でた。崖にぶつかった海風が健二のところまで巻き上がったのだろう。堪らず健二は目を細めた。
そして、恐る恐る目を開くと、健二の視界は、鮮やかな青色に染められていた。
空は気持ちの良い快晴だった。
健二はまるで久しぶりに室内から外へ出たような、妙に新鮮な錯覚に陥った。そんなはずはない、今日も朝に家から会社へ出勤してきたのだ、と健二は改めて考え直したが、しかし、それでも健二に与えた感覚は強烈だった。
健二は一度遠くの空を見上げ、そのままゆっくりと視線を落とした。青が徐々に薄くなり、そして一本の水平線を境に、再び深い青の色を取り戻していた。きらきらといくつもの陽光を反射させ、風にあわせて動く海が見事なまでに眼下に広がっていた。
見慣れていたはずの北陸の海は、これほどまでに美しかったのか。健二は先ほどの恐怖に上書きするように、より強く体を震わせた。空気の冷たさに反して、日差しはとても心地のよいものだった。車内のエアコンとは比べ物にならないほど、清々しい暖かさだった。
健二は空を仰ぎながら大きく空気を吸い込み、体に留まっていた倦怠感と共に一気に吐きだした。
「……気持ちがいいな」
「え？」
健二の唐突な呟きに、高橋は耳を疑って聞き返した。
「気持ちがいいんだ」
健二は再びそう言いながら、ゆっくりと両腕をまわして、もう一度、深く呼吸をした。直前までの体の気だるさは嘘のように取れていた。むしろ、自然と朝に目覚めたときのよ

うな爽快感が、健二の体を満たしていた。まるで生まれ変わったようだ、と健二は思えた。
その様子を見ていた高橋は、首を傾げながらも「とりあえず戻りましょう」とだけ告げて、運転席へと乗り込んだ。

「これから何処へ行くんだ？」
「は？」
高橋は先程と同じように、しかしよりも驚きを込めた声で、助手席に座った健二の言葉を聞き返した。ハンドルを握りながら高橋は健二の顔を伺ったが、健二は窓枠に肘を預けたまま穏やかに前を向いていた。
「ちょっと、本当に大丈夫ですか健二さん。さっきので頭でも打ったんじゃないですか」
高橋は小さく笑いながら、からかうように健二に返した。
「いや、大丈夫だよ。本当に。どこも打ってないし、痛くも無い」
「会社に戻るんですよ」
「会社か。そうか、会社か」
健二も高橋と同様に、小さく笑いながら答えた。高橋はもう一度、健二の顔を盗み見てから「勘弁してくださいよ」と溜息混じりに呟いた。
健二は終始穏やかな笑みを浮べていたが、心中では『会社か。そうか、会社か』と、何度も同じ事を唱え続けていた。しかし、幾ら繰り返し唱え続けても、その言葉は一向に健二の胸に落ち着こうとしなかった。どうにも今の健二には、「会社へ戻って働く」という当たり前の行為が、やけに現実味の無いことのように思えてならなかったのだ。
会社に戻って自分は何をするべきなのか。何のために会社に戻るのか。
二十年以上、ほとんど休むことなく勤めてきた会社だった。今や一つの部を任されている健二が、会社でどんな仕事をするべきなのかわからないはずがなかった。しかし、考えれば考えるほど、健二の感じる違和はどんどんと濃くなっていくばかりだった。そして、追うように健二の心に浮かぶものは、先刻のまばゆく澄んだ一面の青色の光景だった。目を閉じればよりはっきりと見ることができた。手を伸ばせば届くのではないかと思えるほど強く引かれた水平線が、健二の瞼の裏にくっきりと描かれている。これまで当たり前だと思っていたことが、今の健二には、どうも他人事のように思えてしまうのだ。
健二を染めた色は、会社に戻った後も青く光り続けていた。

気が付けば、健二は会社の前に立っていた。太陽はまだ高く、歩道に融けた雪はきらきらと反射して健二の顔を照らしていた。その眩しさに俯いた健二は、いつの間にかに手に持っていたカバンを不思議そうに眺め、そして時間を掛けて、ようやく半刻前の出来事を思い出した。
会社に戻った健二は、さっそく頭に浮かんだ疑問を上司に尋ねることにした。「あなたはなぜ、仕事をしているのですか」と。数秒後、上司の顔がみるみる赤くなっていくのを見

ていた高橋は、血相を変えて健二と上司の間に入り、上司に対して「事故未遂」についての説明を始めた。加えてそのときからの健二の様子の変化も、申し訳なさそうな顔をしながらも、事細かく報告したのだった。上司の顔色が元の色へと戻り始めたころ、健二は早退と健康診断、そして数日の有給消化を命じられることとなった。

健二は「そうか、そうか」と頷きながら、緩慢な動作で駅に向かって歩き始めた。凍った雪が靴底で小気味よく弾けた。それを見て思わず持ち上がる口角に、健二は『本当は頭を打ったのではないか』と自らを疑うほどだったが、やはり体の何処を意識しても痛みを感じる部分はなかった。むしろ、体の調子はここ数年感じたことのないほど良いように思えたほどだった。

それにしても、従うままに取ってしまったこの休日はどう過ごそうか、と健二は頭を悩ませた。年末年始と盆以外のまとまった休みなど、健二は暫く経験していなかったことだった。一人でのんびりと散歩などをして過ごすか、それとも久しぶりに家族サービスでもしてみるか。そんなことを考えながら、健二はひときわ大きな雪だまりを踏み砕いた。

健二がリビングで早々にビールをあおっていると、慌しい足音が玄関から響いてきた。

「まあ、びっくりした。今日は早いのね」

「おかえり、多賀子」

健二は腰を上げて妻の多賀子を快く出迎えたが、多賀子はろくに目も合わせず、足早に自室へと入ってしまった。扉を閉める音がリビングに軽く響き、健二は溜息をつきながら深く椅子へと座りなおした。

健二が作り上げてきたはずの家庭は、この上なく冷め切っていた。妻の多賀子との会話は健二の思い出せる限りでは必要最低限のものだけであり、ましてや高校生になった健二の息子・裕也に対しては、顔を見る機会さえも少なくなっていたのだ。日々の仕事で遅くに帰宅する健二の食事は常に別に用意されており、健二が帰宅するころには二人とも就寝してしまっていることも多かった。そして、休日の食事は家族各々で用意するというのが、いつの間にか暗黙のルールとなっていた。これが、健二の家庭の普通だった。まるでルームシェアしているだけの他人のようだ、と健二は残りのビールを煽りながら思った。

この状況を作り上げてしまったのは、紛れも無く自分だと健二は気付いていた。どうしてこれまで危機感を覚えなかったのか。仕事に従事することで、家族に貢献できていると少なからず考えていた。しかし、それはただの自分の甘えだったのだと、健二は強い後悔と共にきつく噛み締めた。

では、どうすれば取り戻すことができるのだろうか。

そう考えたとき、健二は一つの計画を思いついた。

本当に午後から用事あるから、と不機嫌そうな声色で健二に告げ、多賀子は助手席へと乗り込んだ。裕也は既に後部座席に座って携帯電話に向かっている。健二は二人がシート

ベルトをきちんと締めていることを確認したのち、ゆっくりと車を発進させた。雪はまだ融けきっておらず、晴天の空の光で白く輝いて見えた。

昨晩、健二は二人に「家族サービス」と称して、三人一緒のドライブを打診したのだった。当然のように妻と息子に渋られた健二だったが、時間を掛けた懇願によって、二人はようやく首肯したのだった。「すぐに戻るなら」という条件つきとはいえ、健二は素直に喜ばしく思った。そしてこれからは再び家族三人で仲良く過ごせるはずだ、と健二は心から確信していた。車内での会話はなかったが、健二は気にはならなかった。

数十分のドライブ後、健二は「さあ、着いたよ」と声を弾ませて二人に言った。突然の報告に、二人ははっと顔を上げて窓の外を見渡したが、表情はすぐに訝しげなものへと変わった。それは山の中腹あたりで、住宅や木々の他に、特に目立ったものは確認できなかったからだ。しかし、二人が声を掛ける前に、健二は再び車を発進させた。車は徐々にスピードを上げて、凍りついた長い下り坂を降りていく。

自分と同じように変わるかもしれない、あの青い世界で見た霹靂を見せてやれば。

健二は穏やかな表情のまま、しかし、右足は強くアクセルを踏み込んだ。そして、三人を乗せた車は、勢いよく縁石に乗り上げたのだった。

<了>